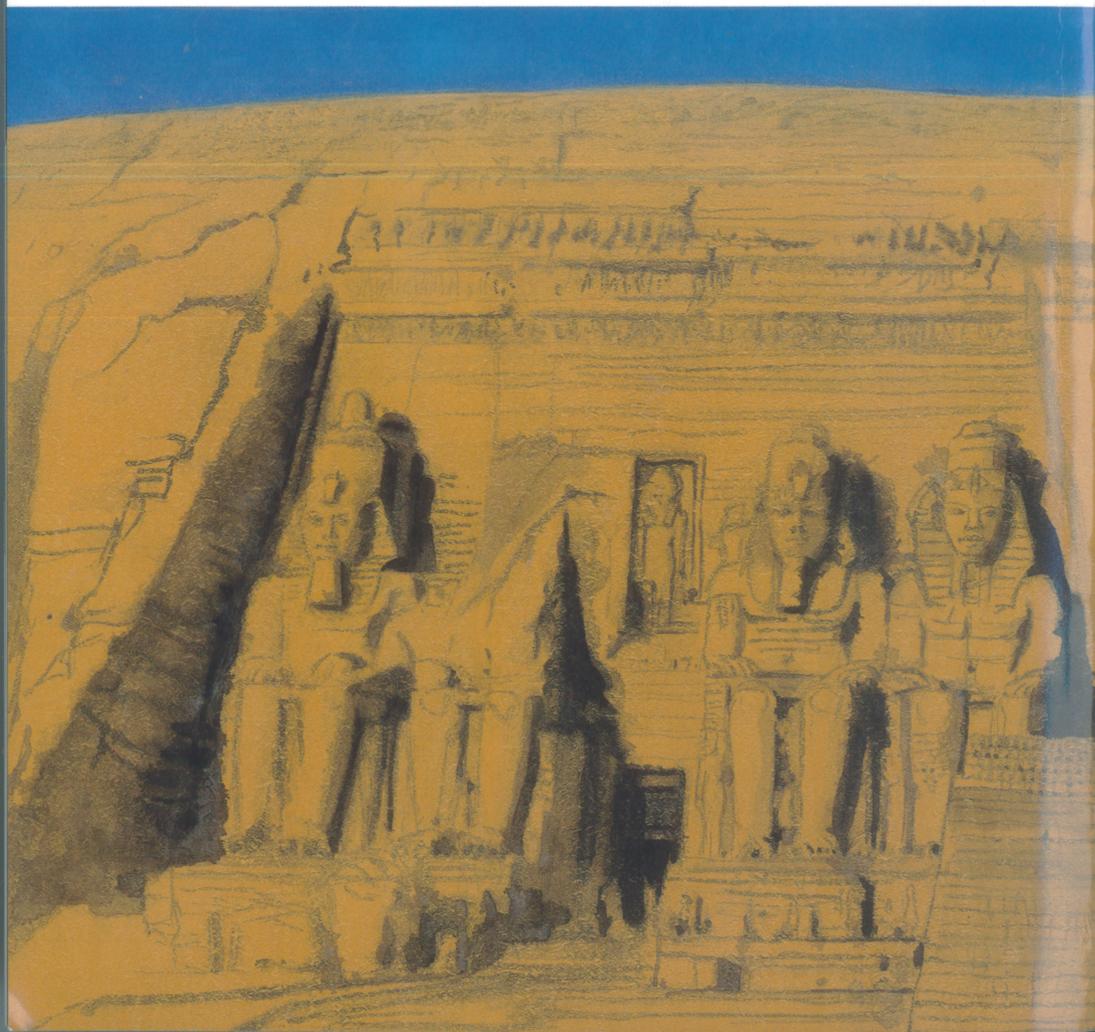


# 文藝春秋

大正十二年一月三十日第三種郵便物認可  
平成二十七年十二月一日発行(毎月一回一日発行)  
第九十三卷第十四号十一月十日発売

## 安倍晋三「一億総活躍」わが真意

皇后さま八十一歳の「ご覚悟」/ノーベル賞 大村智 梶田隆章 十二月号



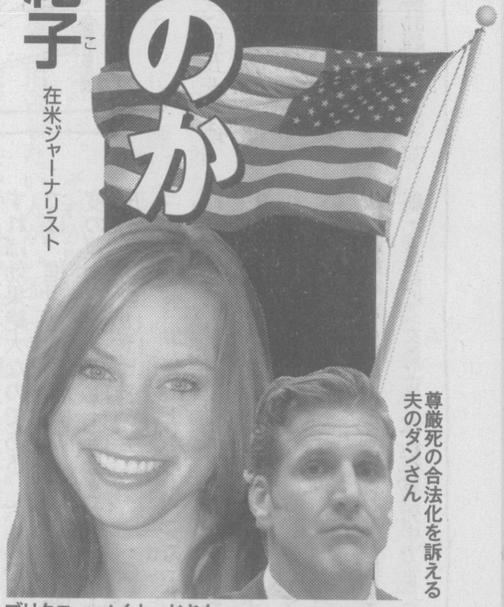
# アメリカ発

# 「死ぬ権利」をなぜ認めめたのが

尊厳死を望んだ二十九歳女性が世論を動かした

飯塚真紀子

在米ジャーナリスト



尊厳死の合法化を訴える夫のダンさん

ブリタニー・メイナードさん

二〇一四年、十一月一日。オレゴン州ポートランドのある家のキッチンで、男が小さなカプセルを次々と開けていた。カプセルの中身はセコバルピタルという催眠鎮静剤。カプセルの中に入った粉末をコップの水に丁寧に溶かして行く。その数約百個。

家の二階のベッドルームでは、男

の妻が、集まっていた三人の友達や両親と楽しかった思い出を語り合

い、感謝の言葉を伝えていた。

粉を溶かし終えた男は、その溶解液を持って行くと、愛犬とともに妻の横たわるベッドに入った。溶解液を飲んだ妻は、五分ほどで眠りについた。ゆっくりと、小さくなっていく呼吸。そして三十分後には最後の息を吐いた。夫の腕の中で穏やかに迎えた死――。

昨年、尊厳死を選んだことで世界中の注目を集めたブリタニー・メイ

ナードは、こうして夫ダンに抱かれながら二十九年の生涯を閉じた。

ブリタニーの尊厳死から一年を目前にした十月五日、サクラメントのカリフォルニア州議会では、ジェリー・ブラウン知事が「エンド・オブ・ライフ・オプション法（終末期選択法）」と名付けられた尊厳死法案に署名し、こんなメッセージを書き添えた。

「長い激痛の中で死ぬことになった

ら、私自身はどうするかはわかりません。しかし、この法律があれば安心感を得られます。他の人が「死ぬ権利」を得ることを否定しません」

カリフォルニアは、オレゴン、ワシントン、バーモント、モンタナに

次いで、アメリカで尊厳死を認めた五番目の州となった。州民は、二人

の医師が不治の病で余命六カ月以下と診断すれば、致死薬を入手することができるとなる。

法案が提案されたのは今年一月二十

十日。過去二十五年の間に四回も提案されたが本会議に上がることすらなかった法案にしては、異例の「スピード承認」だった。ブリタニーの尊厳死から一年の間、アメリカで何が起きていたのか。

## 四十八時間で八百万人が視聴

始まりは、サンフランシスコに住

む弁護士トニ・ブローダスが、全米最大の尊厳死推進団体「コンパッション&チョイスズ（思いやりと選択）」から、カリフォルニア州で法案を通すためのキャンペーン・ディレクターに抜擢された二〇一四年五月に遡る。

トニは、カリフォルニア州での同性婚法案の成立に尽力したことで知られる運動家でもある。個人の選択の自由を広げるために反対勢力と戦い、権利を勝ち取ることでその名は轟いていた。前回、カリフォルニア州で尊厳死法案の議論が巻き起こってから七年。再度、法案承認に向けてチャレンジするには、トニは同団体にとって欠かせない人材だった。

そんなトニが立てたのが「キャンペーン五カ年計画」だった。まずは、数年をかけて尊厳死について市民教育を行い、次に立法化に進めるための政治活動をして、議会での公

聴会を経て、五年後の法案承認を目指す。ところが、ブリタニーが同団体に、尊厳死宣言をした動画をウェブサイトに掲載してほしいと依頼してきたことで計画は一変した。昨年十月六日に掲載された動画は、一時間で十万人を記録、四十八時間で八百万人が視聴するほど世界の注目を浴びたからだ。

「様々な社会問題に取り組んできましたが、こんなに注目を集めたことは今までありませんでした。数年はかかるとみていた市民教育が、ブリタニーの動画で一瞬のうちにできてしまったんです。この機運に乗って、法案を一気に進めない手はありませんでした」

とトニは振り返る。

ブリタニーは自らの尊厳死のために、カリフォルニア州の自宅から六百マイルも離れたオレゴン州に引越さなければならなかった。カリフ

オルニア州での立法化を願っていたが、彼女の遺志を引き継いだ夫ダンも活動に加わった。ブリタニーの死去後、法案推進を考えていた州の議員たちもトニに接触してきた。ブリタニーを中心に、州政府、運動家、州民が三位一体になる絶好のタイミングが訪れたのだ。

しかし、これまで何度も挫折したのは、反対意見の多い法案だからである。トニは戦略を練り、まずは、リサーチ会社を雇って州民の考え方を調査させることから始めた。トニは言う。

「アメリカでは全てがマーケティング。商品売る場合、人がどんな物を欲しているか市場調査しますが、政治でもマーケティングが重要なです」

トニは州民に「尊厳死法案」を売るため、州民が尊厳死にどんな懸念や不安を持っているか、誰がどんな理

由で反対しているのかを探り、それを解決する要項を法案に反映させようとした。様々な人種からなるフォーカス・グループを十六も作り、それぞれのグループに意見を聞いた。そんな中、トニは様々な発見をする。

「尊厳死を選択しようとしている人を『患者』と呼ぶか『人』と呼ぶかで人々の見方が変わりました。『患者』は尊厳死のオプションを得るべきだ」とするより、『人は尊厳死のオプションを得るべきだ』と表現した方が、法案支持率が5%も上がったんです。これはカリフォルニアの人口を考えると非常に大きな数字です。人とした方が自分のことのように考えられるし、判断能力もあると考え

ナ死に方をするか、手術の段階で理解していた。末期には、身体全体が震え出したり、意識を失ったり、筋肉が収縮して倒れたりするような発作に襲われ、その頻度や重症度が増して行くこと、アグレッシブで興奮しやすい人格が変わること。ブリタニーはつぶやいた。

「こんな死に方したくないわ。人生最後の時間を、なぜ酷く苦しみながら終えなくてはならないの？」

### 「こんな死に方したくない」

ブリタニーは理性的に現実を直視するタイプだった。この病気で自分がどんな経過を辿って、どん

「彼女から尊厳死の話が出たときはショックでした。どんな治療ができるのか模索していた僕は、なかなか理解できなかった」

しかし、その時、ダンには自問した。自分が彼女の立場に置かれたら

「尊厳死は個人の選択肢の一つであることを強調しました」

電話やオンラインで行われた調査でも、州民の六九%が法案を支持していることがわかった。

トニは、サクラメントにあるロビイ会社四社と契約して、議員にも圧力をかけた。信仰心や家族の状況など各議員の背景を調べ、それぞれに適したアプローチを考えた。例えば、信仰心の強い議員には、聖職者が説得に当たるといった具合に。

そんな戦略の中で何より説得力を持っていたのはダンの体験談だった。死はロジカルに割り切ることができない、パーソナルな出来事だ。人を感情移入させ、共感させることができたなら支持を得られる。ダンは議員一人一人に面会に行き、ブリタ

「その日を境に、ブリタニーの表情が変わったんです。これで安らかに死ねると安心したからでしょう。それだけ彼女は惨い死に方をすることを恐れていたんです。そして、残された日々を存分に生き始めました」

自然が好きでブリタニーは様々な国立公園を旅した。化学治療や放射線治療などの治療を受けていたら、数カ月は長く生きられるかもしれない。しかし、辛い闘病でやりたいことはできなくなる。尊厳死を選ぶこ

「彼女から尊厳死の話が出たときはショックでした。どんな治療ができるのか模索していた僕は、なかなか理解できなかった」

しかし、その時、ダンには自問した。自分が彼女の立場に置かれたら

「尊厳死は個人の選択肢の一つであることを強調しました」

電話やオンラインで行われた調査でも、州民の六九%が法案を支持していることがわかった。

とは、ブリタニーにとって、「人生の長さ」ではなく、「人生の質」を選ぶことでもあったのだ。

ゴールを決めて、生き続けようと思った。まずは九月二十六日の結婚記念日まで、その日が過ぎれば、ダンの誕生日の十月二十六日までというように。メディアは十一月一日に亡くなると書き立てた。それはねじ曲げられた話だとダンは何を言っても話さず。

「十一月一日は彼女の次のゴールでした。その後も頑張って生きようと考えていたんです。彼女は話が歪曲されたことを怒っていました」

しかし、その日が近づくに連れ、ブリタニーの病状は日増しに悪化して行った。モルヒネより強い鎮痛剤を大量に打っても、痛みが消えなかった。

そして当日の朝、軽い発作に襲われたブリタニーはいつもより長く眠

のビル・モニングが言う。

「勝因は、これまで尊厳死に強く反対してきたカリフォルニア医療協会を抱き込み、彼らを中立の立場へと変えることができたことです。協会側は、尊厳死のための処方箋を書くかどうかは医師の選択に委ねることに同意してくれました」

医療協会や反対派議員を説得する過程で、モニングは法案に様々なセーフガードを加えた。例えば、患者と医師の間に（家族ではない）説明者を入れること、強制ではなく患者本人の意志であることを確認するために医師と患者が二人だけで話し合う場を設けること（保険会社や医師や家族が患者に尊厳死を強制した場合は重罪が科される）、薬を服用する四十八時間以内に最終確認書に署名させることなどだ。

また、法案では、尊厳死は数ある治療オプションの一つだと患者に確

った後、朝食を食べ、犬の散歩に出かけた。彼女には危惧があった。オレゴン州の尊厳死法では薬は自ら飲まなくてはならない。もし万一、脳卒中に襲われて身体が動かなくなったら、自分で薬を飲むことができない。散歩から戻った彼女は、時がきたのを感じた。続きは、冒頭の通りである。

議員たちを訪ね歩いたダンは、涙なしにはブリタニーのことを語れなかった。議員たちもまたダンの話に涙を抑えきれなかった。彼らも愛する人を亡くした経験をしていたし、身近に不治の病に苦しむ人がいたからだ。

公聴会では、尊厳死を望む癌患者たちも証言した。その一人で、州が尊厳死を認めてくれないという理由で州を提訴していた、大腸癌患者のエリザベス・ウォルナーが言う。

「死に瀕して苦しむ姿は、それを見

認させることも重視した。そのため、医師が、ホスピスケアや緩和ケア、痛みマネージメントなど尊厳死以外のオプションについても患者と話し合うことを義務化している。

「手本にしたオレゴン州の法律にはない保護項目も加えて、患者を守るという点では、アメリカの法律に仕上げることができた」

とモニングは自信を示す。

### 尊厳死を強いられる懸念

カリフォルニア大学バークレー校の調査では、七六%の州民がこの法案を支持しているが、「自殺幫助法案」だと批判する根強い反対派もいる。「死は神の思召し」という理由でカソリック教会が反対しているのは宗教の社会的影響力が強いアメリカらしいが、加えて、身体障害者団体や高齢者団体、癌専門医団体な

る家族たちにも苦しみをもたらします。子供たちには生涯トラウマになるでしょう。家族には安らかな最後の姿を見せたいんです」

同じく公聴会で証言をしていた肺癌患者のジェニファー・グラスが、法案承認直前、緩和ケアを受けながら五日間も苦しんで亡くなったことも議員たちの心に訴えた。

法案推進派の議員たちも戦略的に動いた。下院で法案を通過させることが難しいと判断した議員たちは、まず上院で法案を通過させて弾みをつけた。しかし、下院保健委員会では、構成議員の顔ぶれから十分な票が得られないことが予測されたために、いったん法案を撤回。再度、別のメンバーから構成された下院保健委員会にかけて通過させることに成功した。支持したのは多くが民主党議員だが、三人の共和党議員も支持に回った。法案を作成した上院議員

ども異を唱えている。

反対派団体「自殺幫助に反対するカリフォルニア人たち」のマーガレット・ホールは言う。

「この法律では、貧困層や高齢者、障害者など社会的弱者たちが悪影響を受けることとなります。賛成派は「オプションの一つだから嫌なら選択しなければいい」と主張していますが、そういう問題ではない。最初から選択の余地さえ与えられていない社会的弱者たちは、自ら、あるいは他者から、薬を飲まざるをえない状況に追い込まれてしまう可能性があるのです」

反対派には様々な懸念がある。例えば、アメリカには経済的理由で保険に加入できない貧困層が多数いる。緩和ケアが高額なため、彼らはお金のかからない尊厳死というオプションを選ぶ可能性がある。

高齢者や身障者は日頃から家族の

重荷になっていると痛感しているため、余命六カ月とわかれば、これ以上周囲に迷惑はかけられないと尊厳死を選んでしまふかもしれない。あるいは、周囲から、尊厳死を強いられるような状況も起こりうる。

尊厳死法が施行されてから十七年の間に、約千二百人に「尊厳死薬」が処方された（服用したのは約三分の二）オレゴン州では、実際に問題になったケースがいくつもある。例えば、肺癌に冒されていたバーバラ・ワグナーは州の健康保険に入っていた。彼女の健康保険は高額な化学治療代をカバーしておらず、尊厳死を含む緩和ケアなら選択できたという。州に自殺を強制されているように感じた彼女はメディアで実情を訴え、最終的には、製薬会社が薬を無料で提供した。

州が、「尊厳死薬」の経路やそれを入力した患者を監督していない問題も指摘された。肺癌患者のマイケル・フリーランドは自殺未遂の過去があり、ある時鬱病で自殺他殺願望があるため精神病院に入院した。ソーシャルワーカーが彼の家を調べると、銃以外に「尊厳死薬」を発見したのだ。

精神病患者はそもそもこの薬にアクセスできないが、彼は何らかの方法で入手していた。さらには、ソーシャルワーカーは見つけたその薬を没収することなく立ち去ったという。彼は結局、薬を飲むことなく、二年後に他界した。

尊厳死法は癌専門医からの反対も多く、オレゴン州では限られた医師しか処方箋を書いていないという。同州で、癌専門医を務めるケネス・ステイヴンスは「法案承認は悲劇だ」と言い切って、実体験を話す。「十五年前、余命六カ月を宣告された肛門癌の患者が尊厳死薬を処方し

てほしいと私のところに来ました。希望を失っていた彼女を『少しでも長生きして家族たちと一緒に過ごしたくないですか』と励まし、放射線と化学治療に同意してもらったんです。彼女は十五年経った今も健在です。余命六カ月ということ自体、推測に過ぎません。それより長く生きた患者はいくらでもいます」

### 自立性を重んじるアメリカ

ステイヴンスはまた、賛成派が主張している「痛み」は尊厳死を選ぶ本当の理由ではないと指摘する。「末期癌の痛みは大半抑えられます。賛成派には、自分で自分の人生をコントロールしたい、人には頼りたくないという個人主義的な考え方が根底にあると思います。彼らは痛みではなく、誰かに頼り、重荷になることを恐れているのです」

カリフォルニア州の反対派、ホールが言う。

「この法案も自立性を重視していると思いますが、自立することを重んじるアメリカには助け合うという価値観が欠如していることが問題なのです。現実的には、自立できない社会的弱者たちがホスピスや緩和ケアなど基本的な医療にさえアクセスできない状況があります。

「死ぬ権利」で安易に問題を解決するのではなく、人々が助け合えるようなセーフティネットや末期医療が万人に行き渡るシステムを構築することが先決です」

ホールは弱者を守るという社会正義のために法案に反対した。一方のトニは、尊厳死を選択する自由という、やはり社会正義のために法案承認に向けて動いた。二人とも政治的には同じリベラル派だ。違いがあるとすれば、それはホールの次の言葉

が示唆しているのかもしれない。「この法案は、アップミッドルやアッパークラスが支持していて、プアが支持していないという『階級戦争』の色彩もあるんです」

実際、「階級戦争」は数字に現れていた。法案を通すべく戦略的に動いたコンパッション&チョイスズがリサーチ会社やロビー会社などに費やした額は二百万ドル以上。同団体は主に、高齢の富裕な個人からの寄付金で運営されているという。ある意味、人生をコントロールしてきた富裕層の富裕層による富裕層のための法案ということもできる。オレゴン州でも、尊厳死を選択しているのは富裕な白人層が中心だ。一方、そんな富裕層の選択の自由のために、逆に選択の幅が狭まると主張する反対派が法案阻止の活動に費やしたのは十萬ドル。大半はボランティアの活動によるものだった。

現在、反対派は署名を集めて住民投票で法律を覆そうと動いている。賛成派は「署名するなキャンペーン」で対抗しようとしている。人口が多く、進歩的なカリフォルニア州で法制化されたことは、連邦政府レベルでの承認に直結している。昨今では同性婚がその好例である。

ダンが目指しているのも「尊厳死法案」の連邦での承認だ。七月、ダンは長年勤務した食品会社を退職、各地の州議会を訪ねてブリタニーの話を伝え始めた。

「尊厳死というオプションを広めて行くのは、ブリタニーと交わした約束だから」

そう言うとき、ダンはおもむろに財布を取り出した。開くなり現れたブリタニーの運転免許証。免許証の写真の中で微笑むブリタニーが彼にエールを送っていた。